



起業奮戦記

多文化共生社会を

～多文化共生リソースセンター東海

平成19年末における外国人登録者数は215万人を越し、過去最高値を更新した。これは日本の総人口の1.6%を占める。愛知県の登録者数は22万人、全国で東京に次ぎ2位となった。そのような背景の中、今年初の初めある団体が立ち上がった。それが多文化共生リソースセンター東海だ。東海地域の多文化共生の中間支援団体としての役割を果たすべく、すでにこれまで東海地域の多文化共生分野で活躍していた若者たちが集まり、立ち上げるに至った。今回は事務局長の河村槇子さん、スタッフの土井佳彦さんにお話を伺った。

◆きっかけは「直感的に・・・」

多文化共生リソースセンター東海が立ち上がるきっかけは、日本の多文化共生の先駆者である田村太郎氏と、起業支援ネットの関戸が仕掛けたイベントだった。東海地域では外国人労働者の増加によって新たなコミュニティが形成されるようになったが、まだまだ十分な受け入れ態勢はできていない。当事者の自助グループや支援団体などが立ち上がってきているものの、限られた市場の中、受益者負担も難しい状況でビジネスとして継続・安定していくことは困難を伴う。だからこそ、そんな現場支援団体を後からサポートする組織の必要性が叫ばれていた。

そこで開催されたのが前述のイベント「在住外国人支援事業の継続発展を考える懇親会」だった。そこに参加した若者たち7人は地域のニーズに後押しされる形で東海地域の多文化共生中間支援団体の設立準備会を立ち上げた。どうして関わろうと思ったのか。この質問に事務局長の河村さんは返答に困りながらも笑顔で答えてくれた。



「直感的に。おもしろそうだったからです」。

今年の2月には、設立準備会の第1回ミーティングが開催され、同5月、多文化共生リソースセンター東海が正式に発足した。土井さんは当時をこ

う振り返る。「準備会の活動を始めて、多文化共生の幅の広さを改めて感じました。同じ多文化共生と言っても、それぞれ活動してきた分野は違っていったんです。例えば日本語学習支援分野、国際理解教育分野、医療支援分野など。でも、だからこそおもしろいと思いました。」最初の直感が具体的に証明されたからこそ、正式な発足を迎えることができたのだ。

◆発信すれば伝わる！

今年の7月、多文化共生リソースセンター東海は起業支援ネットが主催したイベント「志縁◎循環プロジェクトコミュニティビジネス支援者のためのブラッシュアップ研修」に参加した。研修プログラムの中の一つに、大起業市場を体験する場面があった。大起業市場は本来コミュニティビジネス事業者に出展をしてもらい、一般参加者に模擬投資を行ってもらうのが基本の形だが、今回は支援者が出展し、起業家などの特定の参加者に模擬投資をもらう形で開催された。

「多文化共生についてまったく知らない投資家の人たちへ伝えるにはどうしたらいいかという視点で考え、発信

事務局日記

～スタッフの感じるまま～

「起業支援ネット史上初(?) 職員合宿in谷汲」

去る8月8日～9日、起業支援ネット史上初となる職員全員参加の「合宿」が谷汲山のふもと、ラーニングアーバー横蔵にて開催されました。

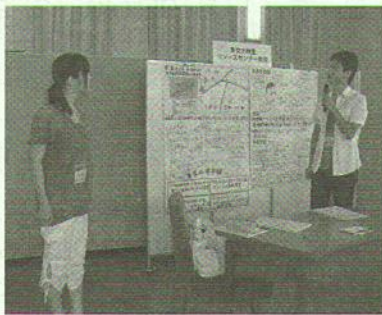
合宿の内容は社内機密(笑)ということにさせていただきますが、初日の到着直後に行われたアイスブレイクの様子についてお伝えしたいと思います。アイスブレイクの内容は「今までにない画期的な

ものを」と鈴木副代表に一任。以下の流れで行われました。

- 1.二人一組のペアを作ります。
- 2.ペアになった相手をよ～く見て。
- 3.似ている有名人を思い浮かべましょう。
(見た目だけでなく、印象や性格でも可。現在の人物だけでなく、歴史上の人物や物語の登場人物でもOK)
- 4.思い浮かべた有名人の名前を、相手に見られないように紙に書いて、相手の背中に貼りましょう。
- 5.全員貼り終わったら、自分の背中に貼ってある人物(自分が似ているらしい人物)がどんな人物であるか、ヒントを周りの人から聞いて回ってください。
- 6.自分は誰に似ているか、わかりましたか?
- 7.順に発表しましょう。背中に貼られた人物と自分が想像した人物は一致していますか?

目指して 始動！～

しました」。まだ団体として活動し始めて2ヶ月の多文化共生リソースセンター東海だったが、ふたを開けてみると、参加した支援団体6つの中でも飛びぬけて高い投資額を獲得した。金額差は他の団体のほぼ2倍。これには当人たちも驚いた。そして、一つの自信につながった。「これまで、先進の中間支援団体もいる中で、自分たちのやるべきことってなんだろうと思う部分もありました。けれど自分たちのやろうとしていることをきちんと伝えれば、必要だと思ってもらえることを肌で感じ、発信の重要性と僕たちが活動していく意味も感じる事ができました」。



◆コミュニティ“ビジネス”としての多文化共生中間支援団体を目指して

ブラッシュアップ研修では、他に事業計画を作るワークもあった。そこで多文化共生リソースセンター東海にとって、もう一つの大きな発見があったと河村さんは言う。「以前の私たちには事業の継続性を考え、物事を中長期的に捉える視点はありませんでした。実際に事業計画を作ろうとしたとき、初めてこの課題に気付くことができました」。

今までの多文化共生の担い手はボランティアが主流だった。しかしこのまま持続可能な事業性を保つには幾分ハードルが高すぎる。「私たちのモデルは田村太郎さん

です。多文化共生事業でお金を生み出していきようになりたい。そして人とお金を循環できるような仕組みづくりをしていきたいです」。そのためにも、今はリソースセンター内部の組織づくりに注力しているという。「今いるメンバーはそれぞれ別の仕事を持っている状態。だからメンバーの提供できる時間と能力を明らかにして、その中で事業を進めていきたいと思っています。」

「多文化共生の定義って、実ははっきりしていないんです。そのため、ないものをいかに作っていくかという難しさはあります。でも、だからこそおもしろいんです。」こう話す河村さんも、土井さんもまだ20代。知らないこと、わからないこともたくさんある。でも思いがあり、仲間がいるからこそ、関わっているんだと胸を張る。そんな彼女らの目指す多文化共生社会を想像してみる。そこで笑っているのは、みらいの私たちだ。

(レポート:伊東かおり)

☆講座案内☆ 連続セミナー 多文化共生“最前線”！2008

11月12日(水)～(全6回予定)

・詳しくはBLOG (<http://blog.canpan.info/mrc-t/>)をご覧ください。

多文化共生リソースセンター東海

BLOG…<http://blog.canpan.info/mrc-t/>
E-mail…mrc-t@canpan.info

事業理念 / ・地域のリソースを発掘・創出・つなぐことで、東海地域の多文化共生社会づくりに貢献する。
・多文化共生のロールモデルをつくり、世界に発信する。

事業内容 / ①外国籍児童・生徒のための進学・進路ガイダンス事業(予定)
②日本語 / 教科学習支援ボランティア養成事業
③外国人支援団体、企業、学校等のニーズのマッチング事業
④多文化共生SNS(ソーシャル・ネット・ワーキングサービス)運営事業

15分程度で終わる予定であったにもかかわらず、盛り上がりすぎて1時間以上も楽しんでしまいました。読者の皆さんも、いちどお試しあれ。

〔問題〕

職員たちはお互いにどんな人物であると言い合ったのでしょうか。当てはまる記号を括弧の中に記入してみましょう。

〔選択肢〕

- Aさん:楠田枝里子(芸人)
- Bさん:紫式部(歴史上の人物)
- Cさん:種田山頭火(俳人)
- Dさん:アグネスチャン(歌手)
- Eさん:ベーター
(アルプスの少女ハイジに出てくる山羊飼いの少年)
- Fさん:湯婆婆(千と千尋の神隠しに出てくる湯屋の主)
- Gさん:アンパンマン(アンパンマン主人公)

〔解答欄〕

代表理事	関戸 美恵子	()
副代表理事	鈴木 直也	()
事務局	久野 美奈子	()
事務局	西井 勢津子	()
事務局	伊東 かおり	()
事務局	長谷川 悦子	()
事務局	森 建輔	()

〔解答〕

起業支援ネットホームページ内「事務局日記」にて発表します。

(文・出題:森 建輔)